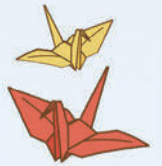


平和への願いを込めて

平和都市宣言推進事業「平和の旅」



8月6日(木)、野々市・布水両中学校から11人の生徒が広島市の平和記念式典に参加し、平和への祈りをささげました。式典前日の5日(水)には、原爆の子の像の前で野々市中学校の矢本弦一さんが平和への思いを込めた「平和へのメッセージ」を読み上げ、平和への誓いを新たにするとともに、両中学校の生徒が作成した折り鶴を奉納しました。参加した生徒の感想を一部紹介します。

野々市中学校3年 矢本 弦一

平和記念公園では、まず原爆ドームを見て、当時の姿のまま残してある技術と当時の戦争の苦しみを後世に残したいという執念の強さに、凄さを感じるとともに、当時の広島が無惨さを身にしみて感じました。その後、ボランティアで案内をしてくれた方の話を聞いたのですが、原爆が落ちてわずか5カ月で、14万人も命がなくなっただけで、原爆の規模の小ささと亡くなられた方の多さに驚きました。そして平和記念資料館に向かう途中で、案内人の方が平和の灯火について教えてくれたのですが、核兵器をこの世からなくすと誓ってから、1964年から今までの62年間ずっと燃やし続けられている。と聞いて、日本が世界で唯一の被爆国なので、日本を含め世界中でもう被爆なんて起こってほしくない

と思いました。

資料館でみた数々の被災でやけどを負った人々や、体の一部を失ってしまった人々、被災者のぼろぼろになった服などを見て、当時の苦しさ、悲しさ、虚しさなどを、感じました。資料館を含め、平和記念公園を訪れ、戦争で実際に起こったことを学び、当時の人々の苦しみを知り、改めて今自分が平和な国で安心して暮らせることのありがたみを感じました。

2日目には、平和記念式典に参加したのですが、間近で高市総理などの普段はお目にかかれない人たちが前にして、張り詰めた空気が漂っていました。この平和記念式典をきっかけに、世界から戦争、紛争、核兵器などがなくなっしてほしいと心から思いました。

布水中学校3年 吉本 紅音

私は野々市市平和の旅に参加して、戦争の恐ろしさや戦争のことを諦めずに伝えることの大切さを改めて知ることができました。広島市を訪れた時、最初に「すぐく発展しているな」と感じました。街の風景は自然豊かだけでなく都市らしさを感じ、街の道路もすぐく整っていました。しかし、平和記念資料館や原爆ドームを訪れるとイメージが変わりました。街の風景では感じられなかった当時の苦しき、戦争の惨さがぼろぼろになった服、建物、手紙、絵など様々なものから長い日常が一瞬で無くなる絶望感をひしひしと感じました。それらは実際に戦争を見ていない私達でも見ると心が苦しくなるものなのに、実際に戦争を体験した方々は必死に苦しいものを見て向き合いながら残そうとしてくれていた姿から戦争をなくしたい、みんなに伝えたいという強い気持ちがありました。

平和記念式典では、実際に戦争を体験し伝えることができる人が減っ

ているという話を聞き、今までに伝えてきてくれた方々に感謝の気持ちと同時に次は私達が伝えないと、という責任感が生まれました。思い出したくないものを思い出し、それを伝えるために形や言葉にして伝えてくれた人々の思いがすぐく詰まっているものを「体験していない世代」という言い訳に頼るのではなく、二度と戦争が起こらないように伝えていこうと思いました。

広島を見てどんなに街が戻っても人の生活が豊かになったとしても戦争があったという事実はこの先も残るし見えない傷がなくなることはないというわかりました。何をすれば平和と言えるのか、何が起これば元通りと言えるのか、難しいことだけれど私達はずっと考え続けなければいけないと思います。旅に参加し、普段実際に触れることのできないお話や意見を知り、戦争について深く考えることができる貴重な体験に参加できたことを本当に良かったと思っています。



原爆ドーム前



平和記念式典後の献花